Ann. Rep. Asahikawa Med. Coll.
1986. Vol.7, 41～58

規則に従うこととプラクシスの問題

岡　田　雅　勝

1　始　め　に

「探究」の201－2節の解釈をめぐってクリプキの投げた波紋がウィトゲンシュタイン解釈に多くの議論を呼んだ。私も「規則一懐疑論の問題」において，すでにクリプキ議論の要点を紹介し，さらにベーカとハッカーに従い，クリプキ議論のウィトゲンシュタイン誤解の問題を辿った（註1）。この小論はその続編として企てられたものである。ここではまず，私がウィトゲンシュタインに従って，私が理解した限りでのウィトゲンシュタインの「規則及び規則に従うこと」の議論について紹介し，そしてさらにプラクシスの問題を吟味し，いわゆるコミュニティに関するウィトゲンシュタインの見解を探りたい。ここまでがこの小論の取り扱う範囲ではあるが，つぎの論文ではそれに基づいてクリプキの提出した規則一懐疑論の問題を再考することを予定している。

2　規則について

ウィトゲンシュタインの規則についての考察は，端的に〈規則とは何か〉ということの考察ではなく，〈規則はどのようにして適用されるか〉という問題に向けられており，規則のさまざまな適用の記述をとおして〈規則の何か〉を示そうとしている（註2）。そこでこの問題を論ずるにあたり，まずウィトゲンシュタインの規則に関する議論を追ってみたい。彼は規則についての議論の展開しているのは，例えばつぎの箇所である。

語と絵とを対応させる図表．－『探究』一部，48，86節

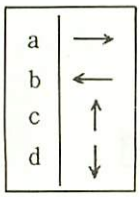
矢印の図形．－『茶色本』90頁，『探究』一部，86節

ある欄に印刷文字があり，ほかの欄には斜体文字がある表－『茶色本』12－13頁，『探究』一部，162節

道しるべ．－『探究』一部，85節，198節

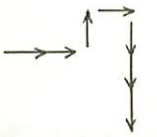
規則としての線．－『探究』一部，222節－237節，そのほか『数学の基礎』に多くの例が示されている。

これらの諸例のうち，ウィトゲンシュタインがこの問題について最初に論じたと思われる『茶色本』からつぎの例を引き合いにして考えるとしよう。



BはAが彼に与える規則に従って動くのであるが，Bには右の図表が与えられている。

(33) Aはこの図表の文字からなる命令，例えば「a a c a d d d」を与える。Bはその命令のおのおの文字に対応する矢印を見て，それに従って動く。

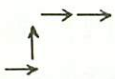


上の例では右のように動く。この上の図表を規則と呼びたい（「規則の表現」と呼びたい）。ここで「a a c a d d d」の文自体を一つの規則とは呼ばない。それは無論「規則ではなく」Bの動く道筋の記録である。しかし他方ではそのような記述もある状況，例えばつぎの場合は規則と呼ばれる（註3）。

(34) Bはさまざまな線書きの装飾模様を描くことになっている。おのおのの模様はAが与える要素図形の繰り返しである。例えばAが「c a d a」という命令を与えると，Bはつぎの形の線を描く。

このとき「c a d a」はこの模様を描くための規則と言うべきであると私は考える。簡単に言えば，私たちが規則と呼ぶものの特徴は，それが無数の事例に繰り返し適用されることにある。例えばつぎの場合をこの(34)の場合と比較せよ。

(35) チェス盤の上でいろいろな駒を用いたゲーム。それぞれの駒の許された動きは規則で定められている。例えばある駒の規則は「a c」，ほかの駒は「a c a a」等とする。そうすると始めの駒は右のように動き，そしてつぎの駒はその下のように動くことができる。「a c」のような式もそれに対応するような図式もここでは規則と呼んでいいであろう。



(36) (33)のゲームの上に述べたやり方で数回したあとで，つぎにこれを変えてみる。つまりBはもう図表を見ないで，Aの命令を読むとその文字が矢のイメージを呼び起こし（連想による），Bはこの想像されたイメージに従って動く。

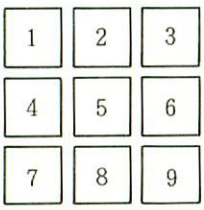
(37) こうしたことを数回したのち，Bはあたかも矢印を参照したか，あるいは想像したかのように書かれた命令に従って動くが，実際はそのような映像の介入は何もないのである。つぎのような変更ことをも想像せよ。

(38) Bは書かれた命令に従う訓練のさい，(33)の図表をただ一度だけ見せられる。そのあとは，図表に頼らないで，(33)のBが図表におのおのの場合に頼ったのと同じ仕方でAの命令通りに動く。

以上の事例のすべてにおいて(33)の図表はそのゲームの規則と言えよう。しかしおのおのの事例では，この規則は違った役割を果たしている。(33)では，この図表はゲーム

の実践と言われるものにおいて使われている一つの道具である。(36) では，それが連想作用で置き換えられている。(37) では，この図表の痕跡すらもゲームの実践にはみられない。(38) では，図表は明らかにただBの訓練道具になっている（『茶色本』95－96)。

このようにウィトゲンシュタインは，規則の定義を与えることによってではなく，規則と呼ばれているものの諸事例を示し，そのさまざまな適用の仕方を示している。彼は，(33)，(34)，(35) など図表で示されるものを規則と呼んでいるが，その場合の図表の果たす役割をさまざまにみている。図表はさまざまな形で示される。書かれたものであれ，イメージに刻まれたものであれ，またイメージのなかにまったく図表を描くことなしにも，実際において図表に従った行為ができれば，図表は規則の役割を果たしている。図表が示しているものに従って，ある行為ができること，つまりゲームができること，あるいはそれで持って命令に従うことができるものであれば，彼はそれを規則と呼んでおり，したがってある行為に指針を与えるものが規則の果たす役割である。ひとびとは図表が表現しているものに従って行為する。このようにしてウィトゲンシュタインがしていることは，「注意して欲しいが，私たちは規則とは何かと言っているのではなく，「規則」ということばのさまざまな使われ方を与えている。そして「規則の表現」という言葉の使われ方を与えることによって，それをしている」（『茶色本』98）ということである（註4)。



『茶色本』に挙げられている規則の表現についての考察はそれ以降の彼の考察と基本的に同じと言えよう。例えば『探究』48節においての，チェス盤の形をした正方形は1から9まで右のような9つの正方形からなり，そのそれぞれの正方形は，赤，緑，白，黒からなっている。それぞれに対応して，「R」，「G」，「W」，「S」という語が与えられている。「R R S G G R W W」という文章は，例えばつぎの種類の合成物を記述していることになる。

「48節の言語ゲームを記述するさい，私は正方形の色に「R」「S」等の語が対応すると言った。こうした対応は何によって成り立つのか。どの程度までこれらの記号に正方方形のある色彩が対応すると言えるのか。48節の説明は，これらの記号と私たちの言語のある語（色彩名）との間に，ある関連を作りだしたにすぎない。ところでゲームにおける記号の使用は別な仕方でも教えられ，特に範例を指示することによって教えられることが前提されていたのである。事実そのとおりであるが，しかしそうすると言語の実践においては記号にある要素が対応しているというのはどういうことか。」（51）（註5)。

「48節の私たちの言語ゲームにはさまざまな可能性があり，一つの記号がこのゲームの

なかでかくかくの色の正方形を指していると私たちが言うような場合がさまざまにある。私たちは，例えばこのように言うのはこの言語を使用している人々にかくかくの仕方でその記号がすでに教えられているのを私たちが知っている場合である．．．．私たちはそのような表は言語の使用における道具だと考えることができる。」(53)．「私たちが言語ゲームの規則と呼んでいるものには，実にさまざまな役割がそのゲームのなかで与えられている」(53)。

ウィトゲンシュタインが与える上の諸例から，規則について彼の言っていることを要約すれば，その特徴として規則とは「規則の表現」であると言うことであり，私たちの規則に従う行為は規則が表現しているものに従った行為である。例えば上に示されていることは，「ａａｃａｄｄｄ」という文がそれぞれに付けられれている矢印の［表現］に従って，ＢがＡの命令に従って行為する指針となるということである。しかし規則の従い方はさまざまにあり，状況に応じて規則はさまざまに適用される。その意味で規則はさまざまな役割を担っているのである。言い換えればウィトゲンシュタインは，私たちの規則に従う行為を言語ゲームのプラクシスとして把えているのである。もう一つの特徴として，規則はたった一度だけではなく，不特定の数の事例に繰り返し適用されるということである。ウィトゲンシュタインが規則について語るとき，いつも具体的な例を引き合いにしているのは，規則という概念が，全ての規則に適用されるような概念ではないということの強調にある。そのことは上に引用した諸例から理解できよう。

さらにこのことは彼の哲学に対する基本的な態度から理解する必要があろう。ウィトゲンシュタインは「言語や思想や世界の本質を問う」という哲学的姿勢で探究を「中断」することを提案し，言葉の使用を展望すること，つまり具体的な言葉の用法にそくした文法的考察をすることを目的としているが，彼のこうした哲学的姿勢から理解されなければならないであろう。それは彼の「家族的類似性」についての考えに基本的に表明されている。「私たちが〈命題〉〈言語〉などと呼んでいるものが，私が思い描いていた形式的な統一体ではなく，多かれ少なかれ互いに類似している諸形態の家族であることを私たちは認識する」(108) と書いているように，彼は規則について語るとき，具体的なゲームにおいての規則に従った行為を引き合いにしている。すでにみてきたように，彼はゲームの多様な規則の適用を記述しているが，どの規則にも妥当するような規則の定義を求めているのではない。彼はゲームの多様性を指摘する。そしてさまざまなゲームに共通するようなゲームの本質を尋ねられても答えを与えることができず，それらには精々それの関係の類似関係を見い出す程度であると主張し，それを〈家族的類似性〉と呼んでいる。規則に関しても同様であり，「規則」は「ゲーム」がさまざまな家族的類似性を持つように，多くの異なるが，しかし互いに関連したものを含んでいる家族的類似性を表す語であると彼は記して

いる（註6）。このように規則の実際的な適用を展望することが規則に関する彼の文法的考察である。したがって彼の規則の概念は，ゲームという具体的な場においての規則に従うことのプラクシスと切り離してはまたっく考えられないのである。

規則は普遍的に考察されないし，またその考察にあたってその実際的な適用の記述以外にないということがウィトゲンシュタインの強調である。それでは，さらにここでまず具体的に規則がどのように適用されるのかをウィトゲンシュタインに従って考察したい。「規則はゲームを教えるさいの助けとなりうる。それが生徒に教えられ，その応用が訓練される。ーあるいはそれはゲームそのものの道具である。ーあるいは規則は教えるさいにもゲームそのものにもその適用が見い出されないことも，また規則表にも書かれていないこともある。人は他人がどのようにゲームをしているのかを見ながら学ぶ。しかし私たちはゲームはかくかくしかじかの規則に従って行われていると言う。なぜなら観察者は実際のゲームからその規則を読み取ることができるからである。ーそれはゲームの行為に伴う自然法則のようなものである。」（54）。

ゲームをすることは，ウィトゲンシュタインによれば一定の規則に従った行為ではある。しかし例えばテニスのゲームは規則に従って行われるが，だがサーブをするさいボールをどれぐらい高くあげなければならないとか，どのぐらい強く打たなければならないという規則はない（68）。このように実際に行われているゲームを見れば，規則がある一つのゲームの全てを規制しているのではないことが理解できようし，「私たちはゲームをするときー〈ゲームをしながら規則を作り上げている〉場合もあるのではないか。そしてまたゲームをしながら一規則を変える場合もあるのではないか。」（83）と述べている。また彼は規則に矛盾が生じた事例に対しては，「例えばチェスにおいてある規則はかくかくの条件では襲われた駒はとらなければならないと言い，他の規則では桂馬はけっしてとってはならないと言うとしょう。そのときにもし襲われた駒が桂馬であれば，この二つの規則は互いに矛盾する．．．この場合私はどうすべきか。極めて簡単である。私たちはある新しい規則を導入し，それによってその矛盾を解決する」（『ウィーン学団』170頁）と述べ，矛盾の出現に対しては，私たちがその都度新しく規則を作りかえ，それを解決し，新しい規則の適用を提案している。

このように規則の実際に即して規則を見ていくと，規則は決して一義的に固定したものではなく，状況に応じて規則の果たす役割はさまざまだし，規則そのものも変えられるし，規則に従った行為そのものも規則によって限定されているとは限らないのである。

ところで以上の事例とは違って，逆に規則にまったく限定されているような規則というものが見い出されるのかどうかという可能性を探り，ウィトゲンシュタインはつぎのように問う。「しかしどんな場合にも規則によって限定されているような規則とは一体どのようなものか。その規則は如何なる疑問が入り込む余地がなく，疑問が入り込む穴が全て閉

ざされているのであるが，そのような規則とは一体どのようなものか。」（84）とウィトゲンシュタインは問い，そしてその可能性を探り，「道しるべ」を例にして考察を進める。「ある規則が道しるべのように立っている。—この道しるべは私の行くべき道について何らの疑問を残さないであろうか。私がそのそばを通るとき，その道しるべは私がどの方向に行くべきかを，つまり道に沿ってか，野の道に沿ってかそれとも野道を横切って行くべきかを示しているのであろうか。どんな意味において私が従わなければならないのか，つまりその示している方向に従うのか，あるいは（例えば）反対の方向に従うのかどうかを何処に書いているのか—そして一つの道しるべの代りに密集して道しるべが立っていたり，あるいは地面にチョークの線が引かれたりしていたとすれば，それらに対して一つだけの解釈しかないのか。—そうだとすれば，私たちは道しるべは如何なる疑問の余地を残さないと言うことができる。あるいはむしろそれはあるときには疑問の余地を残し，あるときには残さないと言える。それゆえこれはもはや哲学の命題ではなくて，経験命題である。」（85）。この考察にウィトゲンシュタインの規則に従うことについての基本的な問題が表明されている。

3　規則に従うこと

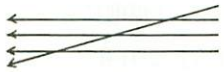
それには二つの問題が提起されている。一つには「道しるべ」に従うことが，解釈に従う行為であるとすれば，私たちは「道しるべ」を前にして上の例のようにそれを多様に解釈できる。つまり「道しるべ」に従うことが解釈によってなされる行為であるとすれば，いま述べたように多くの疑問の余地を残している。しかしもし「道しるべ」にたった一つの解釈，つまりたった一つの理解の仕方しかないとすれば，つまり多様な解釈の余地がない場合，その記号は私たちに何等の疑問の余地を残さないことになる。その場合「道しるべ」に従う行為は，実のところ解釈ではない，文字通り「道しるべ」に従った行為であり，一つのプラクシスである。このようにしてウィトゲンシュタインは規則に従う行為を解釈とみなすのか，それとも解釈の余地のないプラクシスとみなすのかという問題を提起していると言えよう。

ところで私たちの規則に従う行為は，ある状況における行為であり，私たちは状況に応じて規則が表現しているものに従って行為する。このように言えば，規則に従う行為は規則の表現してるものを読み取る行為のようにおもわれ，私たちはある言語ゲームをするさいに，規則を具体的な場面に応じて解釈しながら適用していると考えがちである。上に挙げた「道しるべ」の例は，私たちが目の前にした道しるべに対して多様な解釈の余地を示しているようにおもわれ，それゆえ「道しるべ」という規則が表現しているものは，私たちの解釈によってさまざまな受け取り方が可能であるように考えがちである。はたしてこのような考えは妥当しているのであろうか。ここでこの問題を考えるにあたってウィトゲ

ンシュタインが提出しているつぎの例を引き合いに出すとしょう。

「いまある表を読むためにさまざまな方法が導入されたとしょう。つまりあるときは，つぎのように，

また別のときには，



のような図式，あるいはもっと別な図式に従うというような方法である。ーこのような図式は表を用いるための規則として，表に付け加えられたのである。さて私たちはこのような規則を説明するためにさらに多くの規則を考えることができないであろうか。」（86）。

このことはある規則を私たちがさまざまに解釈できることを意味しているようにおもわれる。私たちは規則を幾らでも解釈し，その解釈に自分を従わせて行為することができることを意味しているようにおもわれる。これは，すでにクリプキ議論において取り扱ってきたように，ある規則は，ａにもｂにも解釈することが可能であり（つまり例えば，67＋58の計算を〈クワス〉計算にも，〈プラス〉計算としても計算できる），新しい状況に対しても規制できるようなものを前もって含むことができない。したがってクリプキの言う懐疑問題の議論が正当な解釈として妥当するようにおもわれる。事実ウィトゲンシュタインに従えば，「”この立場において私は何をすべきかを規則は私にどのように教えることができるのか。私に何をするにしても，それは何らかの解釈によって規則と合致させることができる。”ーいな，そう言うべきではない。どの解釈も解釈される規則と一緒に空中にぶらさがっていて，規則を支えるのに役立たないということである。解釈だけで意味が定まらない。」（198）のである。

規則の表現の理解を解釈だと受け取る限り，私たちは規則をさまざまに解釈することができる。しかしもし私たちが自分が下した解釈に対し，その正当化を尋ねられた場合私たちはその解釈をさらに解釈する以外にない。と言っても，その解釈が私の行為を正当化するのではない。解釈によってその解釈を正当化しようとすれば，さらにその解釈は正当化が必要となり，どの解釈も解釈される規則と一緒に空中にぶらさがって，規則を支えるのに役立たない。つまり「解釈だけでは意味が定まらない」のである。このウィトゲンシュタインの指摘は重要であり，その限りウィトゲンシュタインが「新しい形の懐疑論」を提出しているというクリプキの主張が正当性をもつようにおもわれる（註７）。

ここでウィトゲンシュタインが「解釈」ということでどのように考えているのか，そして「規則に従うこと」が「解釈」でなければ，それは一体何かを考察したい。『探究』201節の最初の前半では，クリプキが主張するようにいわゆるパラドックスが語られており，したがって懐疑的結論を下しているようにおもわれる。しかし201節はここで終わってはいないのである。つぎの指摘があることを逃してはならないであろう。「ここに誤解があることは，私たちがこのような思考過程のなかで解釈につぐ解釈を行っているという事実

のうちにすでに示されている。あたかもそれぞれの解釈がその背後にあるもう一つの解釈が思い至るようになるまで，私たちを少なくとも一瞬の間安心させてくれるかのように。言い換えれば，このことによって私たちは［規則の］解釈ではなく，応用の場合に応じて，私たちが「規則に従う」と呼び，「規則に背く」と呼ぶことがらのうちにおのずと現れてくるような規則の把握［の仕方］が存在することを示すのである。それゆえ規則に従うそれぞれの行為は解釈だと言いたくなる傾向が生じる。しかし規則のある表現を別の表現に置き換えたもののみを「解釈」と呼ぶべきであろう。」(201)。

ここでウィトゲンシュタインはまず規則に従うことを思考の過程のおける解釈だと解する限り，誤解であることをはっきりと指摘している。そしてつぎにこうした誤解に基づく「規則」の把握とは違った「規則」の把握があることを主張している。

それでは，前者の問題から取り扱うとしよう。ウィトゲンシュタインに従えば「解釈」という語は，二通りの受け取り方があるようにおもわれる。一つは解釈を思考過程の出来事とみるという受け取り方であり，もう一つは規則の表現を別な表現に置き換えたものとみる受け取り方である。ウィトゲンシュタインの立場は，前の受け取り方に対して批判的であり，彼は解釈を心の状態とか，思考過程とする見解に対して徹底的に批判的立場をとっている。彼の心的出来事に関する議論はこうした解釈についての見解に対する批判に向けられている。そこでここで取り上げた第二の解釈，つまり規則の表現を他の表現に置き換えるということが問題となろう。この立場に立てば，解釈はある規則の表現を別な表現に置き換えたことを意味するにすぎない。とすれば，規則に従う行為は結局はもとの規則の表現に従った行為となろう。解釈をこのように解する限り，いわゆるパラドックスの問題は生じない。クリプキが懐疑的パラドックスが生じると考えたのは解釈を心の状態だと受け取ったからであり，ウィトゲンシュタイン自身も「規則に従うということ」をこのように理解する限り，パラドックスが生じ，認識論的に無意味に導かれると考えたのであった。彼に従えば，こうしたパラドックスに陥ることのないような規則の把握の仕方がある。つまり「意味の定まる」把握の仕方があるのである。それではそれはどんな把握の仕方であろうか。そのためにまずここでそもそも意味とは何かを問うことから始めたい。

「“意味”という語を利用する場合に．．．．．語の意味とは言語におけるその用法であると説明することができる」(43)。

「名前や文が意味を持つのは，それらが属している記号体系のなかであり」，「意味とは，語が記号体系のなかで演ずる役割のことである」(『文法』1．27)。

「“語の意味とは，意味の説明が説明するものである”すなわち“意味”という語の使用を理解したいなら，ひとが「意味の説明」と呼んでいるものを調べてみよ」(560)。

「ある駒（石）の意味とは，ゲームのなかでそれが果たす役割である。」(561)。

「文法における一つの語の位置が，その語の意味であると説明したい。しかしまた語の

意味とは，意味の意味が説明するところのものであるとも言える。意味の説明が語の用法を説明する。言語における語の用法がその語の意味である。」（『文法』 1.23)。

以上のように〈ある語を理解する〉ということは，〈一つの言語ゲーム〉を理解することになぞらえられる。例えばチェスを理解するというのはチェスが実際にできることを意味する。このように「意味」および「理解」という語の説明を言語における用法として受け取るとき，規則に従う行為は，決して解釈ではなく，端的に規則に従った行為を意味する。これがウィトゲンシュタインの「意味を定めること」の意味である（註8)。

4　規則に従うこととプラクシスの問題

規則に従う行為を解釈による理解として受け取るのではなく，規則の表現に従った行為として受け取ることをウィトゲンシュタインは主張している。その行為はけっして特異な行為ではなく，ごく自然な行為である。例えば私たちは「道しるべ」を見てさまざまに解釈することができる。そして解釈に従ってさまざまの方向に行くこともできる。しかし「道しるべ」が多様な解釈を許すとしても，「道しるべ」の現実においての果たす役割は多義的であってはならない。ウィトゲンシュタインの主張の要点は「道しるべはーそれは普通の状態でその目的を果たすならー正常なのである」(87) ということにある。

ウィトゲンシュタインは，この普通の状態で規則に従った行為をすることを考察しているのである。これは『論考』の立場に対する反省である。『探究』のなかにつぎのような表現がみられる。「命題，この不思議なもの！」。ここにすでに全叙述の昇華がある。」(95)。「私たちは，命題とは何か独特のことをするものでなければならないとおもいこんでいる。ー誤解によって私たちには，命題が何か奇妙なことをするようにみえる」(93)。「私たちは，私たちの探究においての特殊なもの，深遠なもの，私たちにとって本質的なものが，言語の比類なき本質を把握しようとする点にあるというような錯覚に陥っている。」(97)。「一方において私たちの言語のどの命題にも〈あるがままで秩序がある〉ことは明らかである」(98)。「哲学者たちが，ある語ー“知識”，“存在”，“対象”，“自我”，“命題”，“名辞”ーを用い，そして事柄の本質を把握しようとしているとき，ひとはつねにつぎのように問わなければならない。一体この語は，その元のふるさとである言語において，実際にそのように用いられているのか，と」(116)。「哲学は言語の実際的使用と決して抵触してはならない。哲学は最終的に言語の用法を記述できるだけである」(124)。「私たちにとって最も重要な事柄の様相は，その単純さと平凡さによって隠されている。(ひとはそのことがいつも目の前にあるがゆえに，気づかない)」(129)。

ここで述べられていることは，「命題」あるいは「言語」を普遍的に考察することに対する批判であり，そして言語の本来的用法へと引き戻すことへの促しであり，それゆえ言葉の実際的用法への促しを意味している。その批判はまた「規則」を普遍的に考察しよう

とする姿勢に対する批判を意味し，さらに「規則に従う」ことの考察にも同じく妥当するのである。よくウィトゲンシュタイン解釈に引き合いに出される比喩，つまりスキュラとカリュブディスとの間のジレンマと名付けられた難問をめぐった問題が議論されているが（註9），ウィトゲンシュタインの強調は，こうした両極端の問題などではなく，規則に従うことのまったくのありふれた事実に向けられている。彼に従ってその要点を一口で言えば，規則に従うことは単純で日常的な一つのプラクシスである。

それではプラクシスの意味を考えるとしよう。「それゆえ，“規則に従う”ことは一つのプラクシスである。そして規則に従っているとおもうことは，規則に従っていることではない。それゆえひとは「私的に」規則に従うことができない。そうでなければ，規則に従っているとおもうことと規則に従っていることとは同じになってしまうからである」(202)。

「プラクシス」は，まずもって「私的な規則」に従った行為ではない。「私的に規則」に従うことは，先程述べたように規則に従うことを解釈だとすることを意味する。私が規則を自分で勝手に解釈し，自分の解釈に従って行為することを意味する。「規則に従っていることと従っているとおもうこととは同じではない」ということの意味は，私的に規則に従うことの批判であるが，また私的言語論批判でもあると言えよう。つまり規則に従う行為を解釈だと受け取る限り，それは解釈を私たちの心的出来事として受け取ることを意味し，私的言語存立の可能性を意味することであろう。したがって「私的に規則に従う」ことの否定は私的言語の存立の可能性の否定を意味する。

解釈に関して私たちが感じる困難は，私たちが規則について何等かの解釈を与え，解釈を与えることが理解だと考える傾向にあることである。確かにどの規則の表現も解釈の余地を与える。その限りその表現はまたさまざまに違った解釈の余地を与えるようになる。しかしこれは無限後退へと導かれる。解釈は規則の表現を言い換えることにあるので，言い換えだけでは解釈は支えをもたない。それゆえ解釈によっては，規則は理解されないのである。そもそもウィトゲンシュタインに従えば理解とは解釈ではなく，規則に従った行為のことである。したがって理解とはすでに「語」の意味について述べてきたように心の出来事ではなく，語を実際に使用することである。その点においてバッドのつぎの解釈は適切であるようにおもわれる。

「チェスの規則の全てが，彼がそのときチェスをすることを決めたのかどうかということが彼の心にある必要はない。発声することの全ては彼がそうだと言ったとき，彼の心にある必要はない。数列は，もし彼が規則あるいは命令との一致において，それをどのように続けていくのかを理解するとすれば，彼の心にある必要はない。語の使用は彼がそのときその事例を理解すれば彼の心にある必要はない」，「語を使用する能力，数列を続けていく能力，発声を産み出す能力，ゲームを続けていく能力を必要とする」，「能力とか傾性は，解釈とは違って記号を伴わない。意味は解釈によって決定されるのではなく，記号

を用いる傾向とか反応するように傾性づけられ仕方によっている。解釈ではない規則の把握の方法は，．．．．ある仕方で行為する能力あるいは傾性の獲得である。私はもし数列を規則から展開できれば，私はその数列を展開するための規則を把握しているのである。私の道しるべの理解は私が多くの事例においてどのように反応するかに示される。私が語を理解するのは私がある仕方でそれを使用できるということである。つまり私が技術を修得しているということである（参照199)。」(註10)。

このバッドの指摘は，ウィトゲンシュタインに従った解釈であり，私には適切な解釈であるようにおもわれる。ウィトゲンシュタインに従えば，ある語を理解することは，語がどのように理解されているのかどうか，語がどのように意味され，理解されているのかを知ることであり，あるいは語の使用の仕方を知ることであり，そのためには，語を使用する能力とかゲームをする能力が必要とされ，そして使用の技術の修得が必要とされる。語の使用（つまり語の意味）は，解釈によって決定されるのではない。規則の把握は，規則に従って行為できる能力，技術の獲得であり，そして規則に反応できる傾性の獲得である。

スキュラの岩とカリュブディスの渦の比喩をマクダウェルに従って用いれば，スキュラとは，理解はつねに解釈であるという考えである。そしてカリュブディスの渦とは規範の存在しない基底レベルのイメージのことである（註11)。つまりどちら側を通っても，航海は危険であり，破滅が待ち構えている。安全な航路はその中間地帯を通り抜けることであり，それは規則に従う行為を慣習とか，実践として受け取ることである。つまり規則に端的に従うことである。規則に従う行為は，解釈でも規範が適用されないレベルまで行為する基盤を掘り起こしていくことでもないと言うのである。

〈私は何をしようと，解釈を通して規則と一致しているのか〉という問題と〈私は何をしようとも，規則に一致しているのか〉という問題は異なっている。前者の問題は，規則に従う行為を解釈として把えようとする立場である。その限りスキュラの岩に砕けて，破滅へと至る立場である。後者の問題は，私たちの規則に従う行為は解釈による行為ではないが，私たちがどんな行為をしたとせよ，それは規則と一致した行為であるのかという問題の提起である。その限りどんな行為も規則と一致させることができるのであるとすれば，規則は行為を決定させることができないというパラドックスが生じる。つまりカリュブディスの渦に巻き込まれてしまうのである。こうした二つの極端な問題に巻き込まれることなく，そしてこうしたパラドックスの解決のために，ウィトゲンシュタインは解釈ではないような規則の把握があることを指摘している。これがウィトゲンシュタインの言うプラクシスである。彼はプラクシスを説明するために道しるべを引き合いにして，つぎのように述べている。「道しるべーは私の行動とどんな関係にあるのか。それらはどのように結びついているのかーおそらく，私はこの記号に対して一定の仕方で反応するように訓練されているので，そのように反応するということであろう。

しかしそれではあなたはただ因果的連関を述べたのに過ぎず，私たちがいまどのような経緯で道しるべに従うようになったのかを説明しただけである。記号に従うということが本来どこにあるのかを説明していない。いなである。私がいまさらに指し示していることは，ある恒常的な使用，あるいは習慣が存在する場合に限られる，ということである。」(198)。このようにしてウィトゲンシュタインは二つの極端な事例ではない規則に従った行為がプラクシスであり，それはまさしく私たちの日常的な行為であると指摘しているのである。規則に従うことは，規則の恒常的使用であり，習慣であり，つまりプラクシスである。これこそウィトゲンシュタインの言う規則の本来的な用法である。こうした規則に関する文法的考察が後期ウィトゲンシュタイン哲学の中心的課題の一つであったと言えよう。

5　規則に従うこととコミュニティの問題

「規則に従うこと」が，ある恒常的な使用，あるいは習慣が存在する場合に限られた一つのプラクシスであるとすれば，それは，まず「ただ一度だけ，たった一人の人間だけがある規則に従っていたということはありえない。たった一つの報告がされ，たった一つの命令が与えられ，あるいは理解されていた等のことはありえない。」(199) のである。そして私たちは規則に従っているときには，あれやこれやと解釈したり，選択しているのではない，「盲目的に規則に従っている」(219) のである。ウィトゲンシュタインは「規則に従うことを命令に従うことと似ている」(206) と述べているが，例えば部下が上司の「命令に従うこと」は，その者が上司の命令通りにすることであろう。部下は「命令に従う」ように訓練され，一定の仕方で反応するように訓練される。しかし上司の命令に対して，部下の者によって反応の仕方が異なったとしたらどうであろうか。例えば上司が「水！」と言えば，あるひとは〈水を持ってくる〉，ほかのひとは〈水を捨てに行く〉というようにそれぞれ異なって反応したらどうか。上司の命令にひとによって異なったように受け取られるなら，その命令が理解されていないし，また命令がよく実行されるように訓練されていないことを意味しよう。「水！」という命令に対しては，判断したり解釈したりする余地を与えず，訓練された通りに行為することが課せられているのである。

言い換えれば，ある一つの命令に対しては違ったことがなされるのではなく，同じことがなされることが命令という言語ゲームの実際である。私たちはどのような状況において，命令がなされ命令が理解され，そしてどのようなとき，命令に従ったとか背いたというのかを振り返ってみることをウィトゲンシュタインは促している (206) のである。このことが規則に当てはまる。彼はつぎのように言う，「どのようにしたら私たちは規則に従うことができるのか」，「それは私が規則に従ってそのように行動したことに対する正当化への問いである。私は正当化を尽くしてしまったら，私は確固たる岩盤に達しており，そ

して私の鋤はそりかえってしまう。そのとき私は，“まさにそのように行為している”と言いたくなる。(私たちは説明はその内容ではなく，その形式をしばしば要求するということを思い出せる。私たちの要求は建築術的である。説明は何も支えない一種のみかけだけである。」(217)。

規則に従うということは「私たちの言語ゲームの根底となっている」(『数学の基礎』VI28) のであり，規則に従うというのは，正当化を必要としないレベルにおいて正当化なしに盲目的に規則に従う行為なのである。無論そうした場合「正当化」ということと「正しい」という語の用いられ方は根本的に違っている。規則に一致すれば正しいのであり，規則に従わなければ間違っているのである。このことはすでに規則を学ぶさいに教えられている。ウィトゲンシュタインはそのことに関して，つぎのように述べている。「正しいという語と違うという語は，規則に従った手続きを教えるさいに用いられる。正しいという語は生徒を進ませ，違うという語はひきとめる。それらの語の代わりに“それは規則に一致する－それは一致しない”とおくことによって，生徒にそれらの語を説明できるのか．．．

ひとは，まず“一致”という語の使用を学ぶことによって，規則を学ぶのではない。

むしろ規則を学ぶことによって“一致”の意味を学ぶのだ。」(365)。

それに対して正当化するというのは，規則と実際に規則に従って行為することの間に根拠づけをするということである。ウィトゲンシュタインに従えば，私たちの規則に従う行為はそうした根拠づけなしに端的に規則に従ったプラクシスである。これが「規則に従うことは私たちの言語ゲームの根底をなしている」ということの意味である。つまり正当化なしに，盲目的に規則に一致した行為が言語ゲームの根底となっているのである。私たちは規則の何かについて定義し解釈しながら規則に従って行為するのではない。規則にはさまざまな解釈の余地があるのでもない。私たちは規則が表現するものに従って端的に行為するのである。「規則は私たちに常に同じことを言い，私たちはその言っていることを行うのである」(222)。その意味では私たちは規則が表現しているものと一致において行為するのであり，「“一致”という語と“規則”という語は互いに同類であり，従兄弟同志である。」(224)。またそれゆえに「“規則”という語の適用は“同じ”という語の適用と結びついている。」(225)。例えば「“私たちにとって一つの数列は一つの顔を持っている。”．．．．それは私たちが規則の言っているところだけに注目し行為するのであって，それ以上の手引きを求めない，という事実の表現なのである」(228)。

「規則の表現していることのみに注目し行為する」とウィトゲンシュタインが述べているが，この行為は一体どのような行為なのであろうか。またここで述べられている「一致」，「同じ」という語は一体何を意味しているのであろうか。この問題を考えるにあたり，私たちはここでクリプキの議論を思い起こすとしよう。クリプキに従えばウィトゲンシュタインの懐疑的問題の懐疑的解決の核心は「私たちは自分を正当化するような理由なしに躊

躊なく規則に従って盲目的に行為することにある」というのであった。例えば〈68＋57〉という加法の問題に答えを求められたとき，加法の規則に従って何の躊躇なしに〈125〉と答えるべきであり，〈クワス〉計算の規則が適切であるかも知れない，というような論理的可能性を考えたり，それがどのようにして正当化されるのかなどとは考えずに〈125〉と答えるべきなのである。この行為は正当化はされないが，しかし不当ではない私たちの言語使用の事例である。クリプキに従えば，言明可能性条件に基づいた言語の実際的な使用である。それは，先程の例の計算の場合〈125〉と答えるのが，〈正当化なしに〉正しいと確信に満ちた性向に従ってなされる言語ゲームである。クリプキは，まず言明可能性条件として，〈正しい〉，〈分かった〉という個人の性向を根源なものとみなすのである。といっても，こうした個人の性向が無条件に言語ゲームを正当化するわけではない。言明条件を正当化する諸条件が満たされていることが前提される。それがクリプキの言う「コミュニティ」である（註12）。

ウィトゲンシュタインは，クリプキが言うように規則に従う行為が何らかの形でコミュニティ参与の問題を前提していることは事実である。しかしクリプキが言うように形での「コミュニティ」の前提が不可欠であるのかどうかは吟味されなければならないのであろう。規則に従ったある行為が正しいのかどうかは吟味されなければならないであろう。規則に従ったある行為が正しいのかどうかの決め手になるものに関してのウィトゲンシュタインはつぎの発言は重要である。「“それゆえ，あなたは，何が正しく，何が誤っているのかを人間の一致が決定すると言っている”－正しかったり，誤ったりするのは，人間の言っていることである。それゆえ言語において人間は一致する。それは意見の一致ではなく，生活様式の一致である。」(241)。

6　プラクシスとコミュニティ解釈の問題

ウィトゲンシュタインは 241節において，「正しい」，「間違っている」ことの基準を言語においての人間の一致に求めているが，そのさいの彼の強調は，「意見の一致」ではなく，「生活様式の一致」にある。このことを〈一致〉という語の検討をとおして考察してみたい。

ウィトゲンシュタインは「規則」と「一致」という語は互いに同類であり，また「同じ」という語の適用と結びついていると言っている。その場合あるゲームができるというのは，規則に一致して行為できるということを意味する。ゲームをするというのは規則と一致して行為することであり，規則に表現していることと同じことをすることを意味する。「規則に従うこと」，「ゲーム」をすることは，慣習である（199）．ある慣習があるということ，そのことがウィトゲンシュタインに従えばゲームを可能としている。ところで慣習には当然にも何らかのコミュニティの存在が前提される。しかしながら「生活様式」と「コ

ミュニティ」という語はそもそも同類なのであろうか。コミュニティをめぐった見解がさまざまな形で議論を呼んでいるが，私はここでプラクシスの場をウィトゲンシュタインがどのように解していたのかを考察してみたい。

ウィトゲンシュタインが私たちに示している言語ゲームの例は，どれも原初的言語の形態であり，規則に関する具体的な例も，すでに示してきたように原初的な規則の例である。簡単に言えば，それらについてのウィトゲンシュタインの考察は人間の自然史的事実についての考察である。これをクリプキに従って〈ありのままの事実〉と呼ぶこともできようし，またマクダウェルの「岩盤」と言ってもいいであろう（註13）。ウィトゲンシュタインが「確実性の問題」において，確実で，疑い得ない真理がよって立つ根拠と言える言語的行為が成り立つ場を指摘している（つまり，根拠を求めることを打ち切る，それ以上遡及不可能な言語的プラクシスの場である）（註14）が，ウィトゲンシュタインをこの場を，私たちが通常思い浮かべるような歴史的，文化的，政治的なコミュニティのことだとは直接に指していないようにおもわれる。もし言語ゲームが営まれる場をコミュニティと名付けるとすれば，それは＜学ぶ－教える＞ことの関係が成り立ち，端的に他者と行動様式を共通しうる指示連関の場であり，ミニマムな社会生活が成り立つ場としての言語共同体のことと私は解釈したい。

規則に従うことは，こうしたコミュニティにおける構成員と同じく，規則に一致した行為をすることである。この「一致」は，コミュニティの構成員の多数の意見の一致ではない。多数の構成員が間違った意見を持つことが可能であり，したがって多数の構成員が規則に背いた行為をすることがありうる。この「一致」はベーカーとハッカーの言うように，決して統計的概念ではない（註15）。ウィトゲンシュタインは述べているように，「ひとはまず〈一致〉という語の使用を学ぶことによって，規則を学ぶのではない。むしろ規則に従うことによって〈一致〉の意味を学ぶのである。」（註16）。「一致」は規則を基準として，規則が表現していることと同じことをすることを意味する。例えば大抵のひとびとが「赤」と呼ぶものが「赤」について真であるとは限らない。「赤」についての「赤」と呼ばれる基準となる定義があって，それを基準として「赤」と呼ぶ限り，ひとびとが「赤」という言葉を正しく使用したと言われる。その他に例を示すとすれば，ある計算問題をする場合，大抵のひとびとが同じように計算をして，同じような間違いを犯した場合，そのひとたちは一致した行為をしているのであるが，それは規則に一致した行為ではない。無論あるものを「赤」と呼び，加法なり，乗法なりの計算の規則を作るのは，私たち人間であり，そしてそれを実践する者も私たち人間である。コミュニティは私たち人間が規則を作り，それを実践する場である。この場において人間は規則について同じく反応し規則に一致した行為をする。それがウィトゲンシュタインの言う「生活様式の一致」の意味と言えよう。

どの言語ゲームも生活様式の一部であり，それゆえそれは何等かの規則に従った行為である。規則はそうした行為を導くカノンとして仕える。言語ゲームは一致が前提されるが，構成員たちの意見の一致ではないし，個の構成員の正しいという性向と他の構成員との性向の一致でもない。教師が言語ゲームを教えるさい，生徒に他のひとたちが持つ性向を持たせるようにするのではなく，端的に規則に従うことを教える。つまり規則の適用を学び，規則が表現していることの意味すなわち規則の表現の文法を学ぶ。この規則に従う行為がウィトゲンシュタインに従えばプラクシスであり，習慣的な行為なのである。このように理解するとすれば，生活様式の場とコミュニティとを同じものと受け取ることができよう。

しかしコミュニティに関する解釈は，大変複雑であってすでに私はこの前の論文「規則ー懐疑論」において，クリプキの「コミュニティ見解」とベーカーとハッカーとのそれに対する反論を紹介したが，コミュニティ見解を取ろうとしているひとたちの見解はバッドの「ウィトゲンシュタインの規則に従うことの概念についてのコミュニティ解釈は，〈規則に従うことが一つのプラクシスである〉というウィトゲンシュタインの発言におけるプラクシスの概念をコミュニティのプラクシスと解する。それは誰かが規則に従うことはどういうことかは，コミュニティへの照合なしには説明されなく，コミュニティの構成員がさまざまな事例の反応において当の個人との一致をウィトゲンシュタインの見解だと主張している。規則に従うことの概念はコミュニティの特性によってのみ個のレベルで適用される。規則に従うことの概念についてのコミュニティ見解は個人が従っている規則が存在するのかどうかという公的な基準がなければならないことを意味している」(註17) に要約されるようにおもわれる。しかしバッドのつぎの指摘は重要である。「ウィトゲンシュタインが規則に従うことの概念について，彼がプラクシスの概念とか，それと等価に使用，習慣，制度あるいは技術の概念を導入するとき，彼が描いているコントラストは孤独の個人（孤立において考えられた個人）とコミュニティのプラクシスとの間のコントラストではない。その代わりに単独の場合と多くの事例（一回以上の事例）との間のコントラストである。」（註18）。これはウィトゲンシュタインが「一度だけ，規則に従うことはありえない．．．．．規則に従うこと，報告すること，命令を与えること，チェスをすることは，習慣（慣用，制度）である。）(199)と述べていることから裏付けされる。

ウィトゲンシュタインはけっして客観性のもった公的な基準を確立する必要があると言っているのではない。これまでの私たちのウィトゲンシュタインに従った「規則及び規則に従うこと」についての考察は，こうした客観的な基準をもちえないということの確証の場であったと言えよう。彼が強調しようとしていたことは，「規則」，「規則に従うこと」の普遍的な考察ではなく，それらについての文法的考察であった。彼が懐疑的問題の懐疑的解決をみた場が「盲目的に規則に従う」というプラクシスであった。プラクシスのために，私たちは学習をし，技術を修得し習慣を身につけるのである。したがって，プラクシ

スの強調は直接的に公的な基準を確立する場としてのコミュニティへの訴えではなく，規則に従うことが習慣の行為であり，生活様式の一致であるということの強調にある。そしてさらにバッドが指摘しているように，プラクシスへの言及は，クリプキの言うクルーソーのような孤立において考えられた者とコミュニティとのコントラストの強調にあるのではなく（註19），規則に従うことがたった一度のことがらではなく，習慣に関わるということの強調である。「規則に従うことの概念の適用は習慣を前提とする。それゆえ世界の歴史においてただ一度だけ規則にしたがったと言うことは（道しるべ，ゲームをしたとか，文を発話したとか，等々），ナンセンスとなろう」（『数学の基礎』Ⅵ21），「言語の現象を記述するためには，私たちはどんな種類のものであれ，一度起こったものでないプラクシスを記述しなければならない。」（Ⅴ34），「私たちは一度もなされることのないカードゲームを考案することができる。しかし人類の歴史においてたった一度だけゲームが発明されたが，そのゲームを誰もしなかったというのはナンセンスである。．．．．．

同様に人類の歴史において一度だけ，ある者が道しるべに従ったとは言うことができない。人類の歴史においてボードと平行して歩いたとは言うことができる。．．．．

言語，命題，秩序，規則，計算，実験，規則に従うこと，という語はプラクシス，技術，習慣に関係している。」（同，Ⅵ43）。

このようにしてウィトゲンシュタインは「規則および規則に従うこと」の場をプラクシスとしたが，コミュニティ論者がいう意味のコミュニティの必要性を直接どこにも説いていない。こうした場をもコミュニティと言うのであれば，私がすでに述べたように，〈教える－学ぶ〉関係が成り立ち，他者と行動様式を共有しうる，ミニマムな社会生活が成り立つ場とでも言いたい。

註及び関連文献

この論文の作成にあたり，ウィトゲンシュタイン著作からの引用は本文にその出所を記し，そして頁を添えた。そのなかで，『哲学的探究』からの引用は，一部に関してその節のナンバーのみを記した。

註1　「規則－懐疑論の問題」，旭川医科大学紀要（一般教育）第6号，63－104頁，1985年。

註2　A・ケニーはウィトゲンシュタインの規則の問題に触れて，つぎのように述べている。「規則の本性や規則によって導かれた活動としての言語の本性を論じる場合には，ほとんどつねに彼が具体的な例をあげているのが印象的である。」（Anthony Kenny,Wittgenstein, 172 P．野本和幸訳『ウィトゲンシュタイン』229頁）。

註3　『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』194 P（訳280頁）において，「規則という語の文法は矛盾しているものを規則とは呼ばない」と述べている。

註4　『茶色本』において，ここに引用したよりも，さらに多くの規則の適用及びゲームの事例をウィトゲンシュタインは挙げている。彼は『茶色本』において，規則及びゲームの適用の事例を枚挙し，それによって規則やゲームの文法的考察をしていると言える。

註5　ここに掲載した図表には，赤，黒，緑，白と印刷の都合で文字を入れたが，本文はそれぞれの色彩が塗られている。したがって色彩が塗られていると受け取っていただきたい。

註6　家族的類似性に関して，『哲学的文法』1．73，『哲学的探究』1．53を参照のこと。

註7　クリプキの新しい形の「懐疑論」をベーカーとハッカーは「規則－懐疑論」と名付け，それを徹底的に批判しているが，私自身はクリプキの独創的な解釈を高く評価したい。このことに関しては稿を改めて論ずる予定である。

註8　ウィトゲンシュタインの「意味の問題」についての文法的考察に関して拙論「哲学的文法」（旭川医科大学紀要第4号，27－42頁，1982年）参照。

註9　スキュラとカリュブディスの比喩は，Baker & Hacker,Scepticism,Rules & Language, 58 p, Mcdowell,Following a Rule,section9 (SYTHESE 58 344－345 pp．などで扱われているが，その解釈はそれぞれ違っている。

註10　Malcolm Budd,Wittgenstein on Meaning and Interpretation and Rules, 317 P（SYNTHESE 58, 1984）。

註11　註9で挙げたMcdowellの論文　section 9。

註12　クリプキ自身のコミュニティ見解及びベーカーとハッカーのクリプキのコミュニティ見解に対する批判は，前出の拙論「規則－懐疑論」参照のこと。

註13　Mcdowellの註9で挙げた論文　section 7　参照。

註14　ウィトゲンシュタインの「確実性の問題」に関して，拙論「確実性の問題－＜知＞と＜信＞に関するウィトゲンシュタインの省察」（旭川医科大学紀要第1号，1－13頁，1979年）参照のこと。

註15　ベーカーとハッカーの前出書，chapter2,The Illusions of Rule-scepticism,section4,Flaws in the 'community view'。

註16　『探究』365，『数学の基礎』Ⅵ39。

註17　Buddの前出論文（SYTHESE　58, 319 P）。

註18　註17と同じ箇所。

註19　クリプキのロビンソン　クルーソーに関する議論及びベーカーとハッカーのそれの批判に関しては，拙論「規則－懐疑論」（前出）参照のこと。

（旭川医科大学，哲学）